

近くて遠い国、韓国 (その1：到着編)

高部英明

(本原稿は阪大レーザー研の所内広報誌「Seven Stars」のために書いたものである)

「韓国は近くて遠い国」、これが私の第1印象だ。人の顔、地下鉄の臭い。日本と何も変わらない。金浦空港から地下鉄に乗り、駅を降り、今回の国際会議^{*1}の会場(KIAS^{*2})近くの町並みは、大阪南の下町といった感じ。KIASの客員用の宿舎に荷物を置いた後、食事をしようと10分ほど歩いて通りに出た。そこは、とても賑やかな学生街だった。レストランと思しき所は沢山ある。メニューも店先に書いて有るのに、全てハングル文字で書いているため「読めなーい」。メニューの写真もプラスチックのレプリカも無い。

これが米国や欧州なら、アルファベットで注文でき、中身についても少しは想像ができる。ところが、ガイドブックを見ても、「わからない」。文字の識別ができず、たとえ音が読めたとしても中身はさっぱり分からないだろう。関空-ソウル往復3万円、片道1時間半と近いのに、遠い国。これが着いての第1印象だ。

この近くには有名大学もあり、学生で一杯だ。道の一部がホコ天になっていた。ロックコンサートをやっていたので、つい、その大音響に誘われ、人をかき分け、演奏しているグループを間近に見た。普通の学生で、飾りつけもなく、Tシャツにジーパン。歌に酔いしれて、私も学生時代に戻った気分でした。楽しく聞いて楽しんだ。

町にはKentuckyもKing Burgerもあれば、日本料理店もある。が、「韓国料理を食べるのだ」と、決心し、町をさまよう。歩いてた前のカップルが感じの良さそうな店に入ったので、それに釣られて私も入った。英語は通じない。「何でも良いよ」と、ジェスチャーで意志表示。分かったのかどうか、ウエートレスが「これ」と指すメニューを注文した。

この店は全卓に鉄板があり、赤唐辛子で真っ赤になった肉と野菜のミックスを目の前で焼き始めた。どうするんだろー、と見てみると、これに米、海苔、青野菜をきざんだ物に加え、「キムチ焼きめし」の出来上がり。ビールも注文し、飲みながら食べる。最初は「辛い!」と思ったが、食べてる内に慣れてきて、なかなか美味である。別に出てきたキムチも摘んだが、もはや辛くない。舌がバカになってしまったようだ。これで合計5500W(550円)。

私は外国に行くと、下町の雰囲気が好きで、よくぶらぶらする。このKIASの周りには、下町の雰囲気を醸し出す人の行き来や、店が立ち並ぶ。この学生街、気に入った。

時差はないが旅の疲れで早めに寝た。夜、11時頃、人が入ってきて起こされた。宇宙科学研の堂谷さん^{*3}(翌日、X線天文学が専門の方と知る)。この宿舎にはベッドが3つあり、私は、こんな豪華な宿舎に一人で泊まれると思っていたのに、2人目が来た。「もう一人来るかもね」と言っていたら12時頃、起こされた。野辺山天文台の人だった(立松さん^{*4})。3人で台所、リビング、バス、2つのトイレが付いた宿舎でしばしの共同生活の始まりである。

付録

(*1) 今回の国際会議: First KIAS Astrophysics Workshop “ Explosive Phenomena in Astrophysical Compact Objects ” May 24-27, 2000, KIAS, Seoul.

ブラック・ホールや中性子星、超新星爆発、ガンマ線バーストが中心の国際会議。招待講演は持ち時間 45 分、一般講演は 20 分。参加者 51 名。米国の有名な宇宙物理学者が招待されていたので、交通費が安いこともあり、国内会議での勉強感覚で出席した。今回のワークショップは物理部門の教授でハーバード大学から帰国した Prof. Insu Yi の主催で開催された。会議は Yi さんの個人的繋がりでの濃い研究者を米国、日本から招待し、行われたようだ。その意味で、私は「お邪魔虫」では無かるうか、と会議が始まってから気が付いた。

(*2) KIAS: Korean Institute for Advanced Study (韓国高等学術研究所) の略称。高等学術研究所 (IAS) は戦後すぐ、米国のプリンストン大学に設置され、有名な物理学者に最高の研究環境を与えた。初代の所長は、マンハッタン計画の責任者、オープンハイマー教授で、アインシュタインが戦後からその死を迎えるまで、ここで研究をしていたことで有名。湯川秀樹も客員として招かれている。韓国がこれに習い、ソウルの KAIST (韓国の科学技術庁の研究機関) の敷地内に 3 年前、KIAS を発足させた。所長は 50 代後半の方で、在米生活 30 年のところを、政府に乞われて帰国した。英語もジョークもアメリカ人でした。現在は数学 3 部門、物理 3 部門で、来年度に化学 1 部門新設の予定。

(*3) 堂谷さん: 中性子星やブラック・ホール (総称して「コンパクト星」という) 周りの光電離プラズマの研究をしている若手研究者。X 線観測衛星「あすか (ASCA)」で、20 ほどのコンパクト星を観測し、その周りの降着円盤 (accretion disk) の表面がコンパクト星からの X 線で電離し、そのプラズマから放出される鉄などの輝線 (ライン) に注目し、その強度やラインの形状から、コンパクト星周りのプラズマの形状などを同定する研究。会議では「XSTAR」という NASA のゴダード研究所で組織的に開発されている公開のコードを用い、ASCA のデータを解析していた。XSTAR の Web-site を教えてくれたので、マニュアルを打ち出した。80 ページもあった。森田さんや西村、越智君と解読の予定。彼に知り合ったのは、光電離プラズマを本格的に研究しようとしていた時だけに、幸運であった。

(*4) 立松さん: 長野県八ヶ岳の麓、野辺山にある国立天文台・野辺山電波天文台の助教授。超新星などによる衝撃波加熱を、加熱された分子雲から出る宇宙メーザーを観測し研究している。衝撃波の構造などが観測できる。会議中、韓国の友人の従兄弟の結婚式に参列し、韓国の今風の結婚式の様子をデジカメに撮り、持参の VAIO で見せてくれた。簡素だが、親族の繋がりを重んじる伝統様式のようなものであった。同室の 3 人で毎晩、遅くまで飲んで話をした。偶然にも立松さんの親友が、九大で核融合を研究している理論家で、私も良く知っていることから、最初の話が弾んだ。夏には野辺山でレーザー宇宙物理の話をする事になり (7/31 の「談話会」で講演する)、学生をつれて出かけようと考えている (事情があり先延ばしにした)。

近くて遠い国、韓国 (その2:会議編)

高部英明

(本原稿は阪大レーザー研の所内広報誌「Seven Stars」のために書いたものである)

会議は到着の翌日、5月24日の9時から KIAS のホールで始まった。所長の短い挨拶の後、講演に移った。トップバッターはハーバード大の Narayan 先生で ADAF (エーダフと発音する。Advection Driven Accretion Flow) で、ブラック・ホールに回転しながら落ちて行く降着円盤物質中の角運動量などの流れの理論モデルである。ブラック・ホールの降着円盤の内部では、ケルビン・ヘルムホルツ不安定を始め、磁場も絡んで、大変複雑な乱流状態となり、それが、回転しながら落下していく物質の角運動量を外部に運ぶことにより、物体が落下でき、重力エネルギーが開放されることにより、強力な X 線が発生する。この中ではイオンは大いに加熱されるが、電子の温度は何桁も低いという、異常なプラズマ状態である。

会議では前の2列に Narayan, Kulkarni (Caltech), Wheeler (Texas), Kumer (IAS, Princeton) などが座り、発表者は彼らの質問の洗礼を受ける。韓国の研究者の発表も多数あったが、どこか、「Hand-Wave-Argument」(身振り手振りの説明)が多く、複雑なシミュレーションで参加者を唸らせるという光景は見られなかった。観測では、韓国初の超新星爆発の発見が昨年あったとの報告があり、韓国の超新星観測の夜明けであると熱く語っていた。

カルテクの Kulkarni の話しは、ハッブル宇宙望遠鏡などのデータをフルに使った最新の観測天文学の話であったが、私には焦点がぼけた話しに思われ、想像してたほどに彼が優秀とは思えなかった。ただし、人物は良いやつで、私が持参した「Intense Laser astrophysics-its historical background-」を読んでくれ、「これを書いたのは君か。いや、大変面白く読ませていただいた」と、ニコニコしながら握手を求めてきた。

2日目の最後が私の一般講演(15分の発表と5分の質問)。高強度レーザー天体物理(Intense Laser Astrophysics: ILA)のレビューを行った。しかし、電子・陽電子プラズマの前で時間切れ。「仕方ない、ここで、ストップする」と、言って止めた。すると、機関銃のような質問が飛んできた。5件程度。興味は持ってもらえたようだ。

翌日、主催者の Insu Yi 教授が来て、「貴方の話は大変重要だ。残りの話しもして欲しい。会議の最終日に少し時間がとれるので、いくら欲しいか言ってくれ。枠を確保する」と言われた。「じゃ、30分ぐらいちょうだい」と、了承した。実は、Yi さんは師の Narayan 先生から、私の話の後、「Yi さん、今の話しは大変重要です。ぜひ、全てしゃべって貰うように調整すべきです」と、言われたらしく、そこでこの様な展開になった。

最終日、サマリーの前に、2度目の登場です。中島君の研究結果から始め、水田君の話、そして、森田さんの X 線レーザー天体の話までした。20分喋って質問。この時も色々聞かれた。1点は、強磁場下での相対論プラズマの実験が可能か(確か、Kumer の質問)。なぜ、無衝突衝撃波実験に拘るのか。これは、Kulkarni の質問。さあ、質問も出そろったと思われた頃、Narayan 先生の「それでも、レーザーで、まさか、ブラック・ホールは作れんだろう」と質問ともつぶやきともとれる発言があったので、私

は「いや、ブラック・ホール近傍の重力場に相当する加速度を、超高強度レーザーを薄膜に当てることにより実現できる。一般相対性理論の等価原理に従えばブラック・ホールに落下しつつある原子からの光の特性などがレーザー模擬実験で観測できるかも知れない」と答えた。会場、啞然とした様子であった。

結果として、当初、招待講演45分、一般講演20分であったが、私の場合、20+25=45分と、招待講演扱いを受けた。大変満足している。新たにまた、一群の宇宙物理学者に、ILAの存在を知っていただいたことは、大変幸せである。あの気むずかしい Wheeler から、「いやー、大変面白い話だった」と、お褒めの言葉を頂いた。

水曜から始まった4日間の会議、Brown氏(80ウンオ)のサマリーが終わったのは土曜日の7時前だった。この国では、まだ、週休1日で、土曜も学校がある。LLNLに勤める在米韓国人のPark女史が、「親戚の人達、土曜も仕事。この国は、仕事、仕事よ」と言っていた。古き良き(?)日本の姿がここにまだ残っているようだ。

最後に教訓。自分で正しいと思う「考え、研究方針、内容」を持っているなら、どんな舞台にでも臆することなく出て、主張せよ。相手が一流の人物であるほど、先見性を持っており、理解してくれる。要は、中身の問題であり、やろうとしていることが歴史の正のベクトル方向を向いているかどうかである。

次回は(その3:現代史<政治経済>編)の予定です。

近くて遠い国、韓国 (その3：現代史編)

高部英明

(本原稿は阪大レーザー研の所内版「Seven Stars」のために書いたものである)

息子が高2になり理系コースを選んだ。これから社会は一教科。本人は友人の言葉に従い、「地理が易しいらしい、地理を選択する」と言った。車の中での会話である。私は、「いや、おまえの世代はどんな職業を選択しようとする国際人とならざるを得ない。外国の人と接する時、基本的な礼儀は相手の国の歴史の基礎知識があることだ。この事をお父さんは身を以て体験してきた。だから、是非とも世界史を取って欲しい」と、何度か言い、息子も了解してくれた^(*)。世界史は地表と時間の3次元。これに比べ、地理は2次元で相対的に易しいと思うが、息子に無理を言った。

さて、韓国の歴史。何人が秘書に聞いたが、存外、現代史を知らない(習っていない)ようだ。韓国の現代史から話しを始めよう。

韓国の戦後は、まさに激動の半世紀であった。1945年8月15日、日本の植民地から解放された^(*)。ところが、38度線を境にソ連軍が武装解除した朝鮮北部^(*)と、米軍に武装解除された南部とで、国が南北に分断され、冷戦構造の象徴となった。

50年に始まった朝鮮戦争^(*)で、この対極構造は決定的となった。その後、南朝鮮は李承晩(「リ・シヨウバン」と日本語読みしていた)朴大統領(63-79)と独裁色が強い政治が続いたが、現在の金大中大統領(98-)になって、民主化は急速に進み、今や南北問題に決着の兆しすら見え始めた。南北朝鮮の統一が達成されて初めて、世界大戦の世紀の終焉を迎えたことになる。

四度の死線を越えた信念の政治家、金大統領にして初めて可能な行動である^(*)。試験も受けずにコネでW大学に入学したラグビー青年が、またコネでS新聞に入社し、その後、宰相にまでなれる国家と、どちらが真の民主主義に近い国家なのだろうか？日本人の貴方に聞きたい。日本は本当に民主主義の国でしょうか？

朴政権の70年代、ベトナム戦争特需もあり、韓国は「漢江の奇跡」と形容された経済の急成長を遂げた。今、思い出せば、70年代の米国での日本車ブームの後、北米で83年頃、「ポニー」という名の韓国車(Hyundai)が爆発的人気を博し、「日本車の次は韓国車の時代だ」と、当時、堺屋太一などテレビで言っていた。しかし、急速な経済成長は社会に歪みを生み、その金箔は剥げ、経済危機となり、IMFに救いを求めたことは、皆さんのご存知の通りです。

さて、関空で両替しようとしたが「韓国ウォンの両替は現地にてお願いします」と書いている。金浦空港のパスポート検査を出たところに、「両替、韓国ウォン」とあった。2万円を渡したら、バナナのたたき売りよろしく長机を挟んで、二万円と書いたウォン入りの封筒を渡してくれた。100W(ウォン)=10円。

脚注

(*1) 私の考えはこうだ。日本史は学ばなくても、受験勉強から開放されると、日本のことをもっと知りたくなる。これは、テレビや小説など、日本の歴史を題材にしたものが多く、また、良いものが揃っているから。例えば、司馬遼太郎、海音寺潮五郎、子母澤寛などなど。また、海外に出ると日本をすごく意識し、勉強したくなるものだ。地理は、海外に出る機会が多くなると、ガイドブックや現地の人との話などで新鮮な情報が入ってくる。世界史は、色々な要素が絡まるため、簡単に勉強できるものではない。だから、高校でしっかり学べ。

(*2) 明治維新の後、日本は日清・日露の戦争を経て、世界の一等国の仲間入りをした。両戦争とも朝鮮半島に於ける権益に端を発している。日露戦争はロシア帝国が朝鮮半島に侵出する事を防ぎ、朝鮮をロシアからの威嚇の緩衝地帯化する目的で始められた。1年の戦争の後、有名な日本海海戦などあったものの、ロシア革命に救われる形で終戦協定を結び(米国ポーツマスにて)何とか、辛くも勝利した。その後、日韓併合(1910年)により、日本は朝鮮半島を植民地化した。これに対し、米国はフィリピンでの権益を、英国はインドでの権益を日本が黙認する条件の下、日本を非難することはなかった。植民地政策は苛烈を極め、ここに、在日の原点もある。

(*3) 北緯38度線を境に、朝鮮半島の北部は、満州国建国を画策したことで有名な関東軍が管轄していた。関東軍といえば、河本大佐らによる樺樞橋事件(37年7月7日)が日中戦争の引き金となり、日本はそのまま泥沼の第2次大戦に突入していった。

(*4) 1950年6月25日、北朝鮮の軍事侵略により朝鮮戦争が勃発した。韓国は敗戦を重ね、臨時の首都がプサン(釜山)に置かれた。これに対し、米国は国際連合で連合軍による支援を取り付け(ソ連は中国問題で会議をボイコットしていたため、拒否権を発動できず)、連合軍が巻き返しに出た。今度は北朝鮮をも奪還する勢いであったが、毛沢東率いる中国軍に撃退され、38度線を挟んでならみ合いが続いた。結局、53年(私が生まれた年)にソ連が提案してきた停戦協定に米国も署名し、今日に至っている。ただし、韓国は協定にサインしていない(と言うことは、北との戦争はまだ形式的には終わっていないことになる)。

(*5) 金大中著「いくたびか死線を越えて」=我が人生、我が道 =、(千早書房、98年4月、¥1800)を読んで、彼の生き方、考え方、心の広さに感激した。

近くて遠い国、韓国 (その4：将来編)

高部英明

(本原稿は阪大レーザー研の所内版「seven Stars」のために書いたものである)

ソウルに着いて気付いたこと。一般生活では交通費が安い。地下鉄が、1時間ほど乗っても600W(60円)。タクシーも初乗りが1300W。市中心からKIAS(会議場)まで、30分ほど乗ったが、それでも600円ほどだった。ちょっとした距離でも気軽にタクシーを利用できるので便利だ。

会議初日にバンケットがあった。全く気取らない、ビュフェ形式。KIAS内のレストランで行われた。私は野辺山の立松君と座り、Kang君と3人で話した。食事の半ばに、中央にスペースができ、Brown夫妻がダンスを始めた。背の高い二人だ。共に80才は越えている二人が、音楽が始まると、背筋がシャキと伸び、速いテンポにも自然に体が付いていく。人生の晩年を睦まじく手を取り合って楽しむ姿に私は感動した。

次は何のダンス？ ダンサーはYi教授と米国の若手二人(「彼らはとてもすばらしいダンサーなんだ」とYi教授が紹介)。韓国人女子学生3人を加えてダンスの準備。流れてきたのは、日本で言う「盆踊り」風の音楽。Yiさんに合わせ、皆が、見よう見まねで踊って、座興。

2日目の夜、市の中心へ出て核融合研のMoreから聞いていた原書の安い書店、「教保書店」の英書コーナーで専門書を買った。前から欲しかった本が3500円(丸善だと13000円)。中には本の背に金文字で「Korea only」と書いた本もたくさんあった。計3冊買った。何故安いのか？ ワカリマセーン。

3日目は会議をさぼって、Kang君と光化門(景福宮の正門)で9時に待ち合わせた。昼からカルテックのKulkarniの話があるため、午前中だけさぼることにした。彼と、宮殿内を見学したがほとんど再建中であった。というのも、このソウル中心の大通りの突き当たりにある景福宮の門内すぐに、かつて、日本が朝鮮総督府⁽¹⁾(植民地時代の武断政治の中核)の建物を建て、宮殿の背面から来る「風水学」で言うところの山の聖気(精気)を止めてしまったという経緯がある。

博物館内には、その当時の市街模型があった。見ていて「何と日本陸軍は野蛮のそしりを歴史に残す愚拳(ぐきょ)を行ったことか」と、恥ずかしさと、怒りに、立ちすくんでしまった。今、歴史が若者の間で希薄になりつつある時、「人間は歴史から過ちを学ぶことにより、正しい歴史の流れを見極めることが出来る」ということを、もう一度確認したいと、心に刻んだ。

これを、立場を逆にして例えるならば、京都駅前に朝鮮軍が、国会議事堂ほどもある軍の中核機関の建物を、東本願寺の境内から烏丸通りにかけて交通を遮断する形で建てたようなものだ。人間の野蛮の象徴ではないか。いかに武力で人を従わせたとしても、歴史の流れの中でそれらは全て失敗し、民主独立、民族団結に野蛮が屈してきた事は歴史の示すところである。

ひるがえって、科学行政に焼き直せば、政治家がいかに札束で科学者のホッペタを叩こうとも、人類の希求に叶わぬ研究など、時間が経つほどに滅び去るの例にしかずである。核融合はいかなる立場にいるか、各自、熟考していただきたい。若き研究者一人一人が蛮行の先兵となることのなきことを、老兵に

仲間入りをしつつある私は、祈りたい。付け加えるならば、歴史を具現しえぬ老兵は歴史の舞台から去るべきであり、それが、歴史への貢献になることを、一人、静かに理解すべきであろう。

あまりに強烈な歴史を目の当たりにし、私はめまい感を覚えた。

帰国してすぐ、「南北直接対話」(6/13-15)のニュースが世界を駆け巡った。金大中の信念と滅私の政治。金正日の複雑な内情を含んだ上での外交。この分断された両国には悲願がある。世界に取り残された冷戦の最後の終焉が間近に迫っている事を感じる。私自身、世紀をまたいだ証人として、人類の賢明なる選択に拍手を送りたい気持ちで一杯である。

今後、南北統一は、ドイツの場合の様に一挙にとは行かないであろう^(*)。しかし、次の世代には緩やかな統一から、実際の統一へと発展していく可能性がある。その時、日本の良きパートナーとして、世界と一緒に発信していける仲間が誕生することを、私は願っている。その時、初めて、「近くて近い国、韓国(新朝鮮民国?)」となるのかもしれない。

今回の4泊5日のソウル訪問。研究上の収穫、そして、新しい人との出会いだけでなく、近い国の鮮烈な現実を目の当たりにして、一人の人間としてこの国のために何が出来るか、考えさせられたことの収穫は大きかった。

脚注

(*1) この建物を歴史の証人として残すかどうか、韓国で世論を分かち議論があったが、時の金泳三大統領は「解体」を指示。1993年に解体され、今は、朝鮮王朝時代の景福宮の復元の最中であった。

(*2) 東西ドイツの場合、人口比は4:1であったのに対し、南北朝鮮は2:1。さらにGDPでは西ドイツと韓国の比は6:1である。やはり、金大中が言うように、緩やかな連合から30年ほどかけ、ゆっくり統一して行くという考え方が現実的な気がする。

写真説明

その1(到着編)

1. 国際ワークショップが開催されたKIAS(Korean Institute for Advanced Study)の建物。正面玄関。車がたくさん止まっているが、車のほぼ7割はHyundai(現代)自動車の車。日本車はない。多分、相互に輸入規制している。

その2(会議編)

2. 会議2日目。講演をする著者。参加者はほとんど右後ろに座っている。最前列右端が主催者のInsu Yi教授(まだ、若い)。奥の2列目にKulkarni(Tシャツ姿)とWheeler(白い鼻ひげの人)が座っている。前列中央は座長(名前、忘れた)。